掲載日:2024年07月26日,面名:EB0XX0,記事ID:K2024072600000013900
(C)河北新報社

難民の子 古着で笑顔に

あす夏祭りで回収呼びかけ

東北生活文化大高（仙台市泉区）が着なくなった子ども服を集め、世界中の難民に届ける活動が5年目を迎えた。今年は地元の虹の丘公園野球場（泉区）で27日にある「虹の丘・みずほ台夏祭り」に回収箱を設置する。生徒たちは「難民の子どもたちを笑顔にしたい」と協力を呼びかける。

仙台の東北生文大高

普通科未来創造コースで「ファッション領域」や「CG・デザイン領域」を選択した2、3年生計44人が参加。チラシをパソコンで作製したり、回収箱となる段ボール箱を色画用紙で飾り付けたりして準備を進めてきた。

夏祭りでは、同校PTAが出すブースの一角にテレビゲームのキャラクターをデザインした回収箱を置く。生徒ら約10人が来場者に難民の現状を訴え、不要になった子ども服を募る。

子ども服の持ち寄りを呼びかけるチラシを校内に貼る生徒

活動5年目「取り組み知って」

3年の岩元琶音（はおと）さん(17)＝宮城県寛谷市＝は「難民の子どもたちが一人でも多く服を着られる環境をつくっていきたい。小さな子どもたちにも来てもらい、古着回収の取り組みを知ってもらえればいい」と話す。

受け付けるのはTシャツやジーンズ、スカートなど洗濯済みか新品の子ども服で、サイズは乳児用から身長160センチまで。衛生面から靴下や帽子、下着は対象外にする。紛争を連想させるどくろや武器、迷彩の柄も避けるよう求める。

同校の職員室前や虹の丘児童センター（泉区）、卒業生の保護者が運営するわんぱく保育園（宮城県大崎市）では10月末まで募集する。11月に発送作業に移る予定。

古着回収は衣服の大切さを学ぶ「服育」の一環。ユニクロを展開するファーストリテイリングと国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）が古着を集めて難民の子どもたちに送る「『届けよう、服のチカラ』プロジェクト」に、2020年に加わった。